

## 樫村 宙子

KASHIMURA Sorako

持続可能なアートコミュニティのあり方に関する研究

A Study on Sustainable Arts Communities

芸術支援領域



### 序章

本研究では、アートコミュニティの概念とそれに必要な要素を整理し、3つの継続的な事例における組織体制の実態と、そこに共通する課題について考察することで、持続可能なアートコミュニティのあり方を明らかにする。

現代において地域の芸術文化創出の拠点は、芸術文化に関わる場所、プロジェクト、人々の複雑な関係によって成り立つコミュニティにある。筆者は自身の経験を通して、あらゆるアートプロジェクトがコミュニティの中に継続することの重要性和難しさ、課題に共通点があると考えた。コミュニティとアートプロジェクトの長期的な関わりをもつ事例を「継続的なアートコミュニティ」として、その要素と課題を総合して捉える。

アートコミュニティのプレ的な概念であるともいえる「コミュニティ・アート」についての先行研究をもとに、歴史的な背景を整理する。1980年代後半から90年代にかけて公共文化施設の整備が進み、2000年代には公共文化会館を中心にアートのアウトリーチ活動が広がった。地域住民と芸術家が協力することで、地域活性化や芸術文化の発展が促進されるが、継続的な活動には資金確保や人材育成が課題となる。現代のアートコミュニティでは専門的な人材が複数のコミュニティを行き来することによる交流が広がる一方で、コミュニティの持続性には、構成員のうち「動く方（風の人）」と「留まる方（土の人）」のバランスが求められる。

本論文では、構成員の自覚や主体性を育みながら創造的な活動が展開される地域コミュニティを「アートコミュニティ」と定義する。筆者が長期的に参与した、茨城県内で20年以上継続している3つのアートコミュニティ事例をもとに、その組織体制と実施している企画における実態と課題を考察する。それによって、継続的なアートコミュニティがより持続可能なあり方を目指すために、必要な要素や共通する課題を明らかにする。

### 第1章 アートに関わる共同体

アートコミュニティにおいて必要な要素は、ネットワーク形成と居場所づくりである。参加者の主体的な関与を促し、コミュニティの持続的発展を支えるためには、「ゆるやかで可変的な」環境や関係性と、それを支えるコミュニケーションが重要である。参加者が自己の多面性に気づきながら受容的な人間関係を築き、自由に自己表現できる場を提供することが、創造的な学びと成長を支える。また、振り返りを通じて個々の意味づけを尊重することが、コミュニティ全体の学びを深める。アートコミュニティにおける「アンラーン」や「受容的能動性」の実践が、参加者が真の創造的成長を遂げるために必要不可欠な要素である。

アートコミュニティは、従来の「ヒト・モノ・カネ・情報」に加え、関係性や文化などの知覚不可能な要素も含まれる。具体的には、地方自治体や市民、アーティストなどの「ヒト」、美術館や公民館、医療施設などの「モノ」、運営に必要な「カネ」、アート文化の創造や発展を支える「情報」が要素となる。これらの要素はそれぞれ異なる規模や強さを持ち、コミュニティの特徴を形成する。

アートコミュニティでは異なる分野とのコラボレーションが不可欠であり、アートのアウトリーチ活動を通じて新たな人々に価値を伝えるための「翻訳者」の役割が重要である。それを教育的な手立てで担うのは「エデュケーター」であり、「アートコーディネーター」は、より総合的にアート活動の運営や調整を通じて、関係者に理解を促しながらプロジェクトを円滑に進行させる役割を果たす。

#### 第2章 事例①水戸芸術館 現代美術センター

水戸芸術館現代美術センターは、1998年の開館以来、国内外の現代美術の最新動向を取り上げた展示や、「その人がその人らしくいられること、価値を更新する場となること」を目指した教育プログラムなど、アートを通じて地域社会との

連携を深めるためのコミュニティを育む事業を展開してきた。運営は芸術監督や学芸員を中心に、市民との信頼関係を築く「フェイス」という役割も存在する。「高校生ウィーク」や「アートセンターをひらく」など、多世代の対話と創作的な活動を促進する場を提供しながら、中には市民と協働して企画・運営しているプログラムもある。現代美術センターは、ギャラリーを「アートが生まれる場」として再定義し、単なる展示空間を超えて、創作と対話が行われるコミュニティの中心としての役割を果たしており、地域活性化や市民教育の場として重要な役割を担っている。

事業やプログラムのバリエーションには富んでいる一方、プログラム単体の継続ができず創出された地域との関わりが維持されにくいことが課題でもある。地域全体での文化活性化を目指すために、近隣の外部施設との協力体制を強化し、地域の「アートセンター」としての機能と価値を地域に伝えていくことが求められている。

#### 第3章 事例②取手アートプロジェクト

取手アートプロジェクトは、1999年から取手市、東京藝術大学、地域市民が共同で始めたアートプロジェクトで、芸術を通じて市民の創造活動や新しい価値観の創造を目指している。若いアーティストの創作発表、市民のアートとの触れ合い、「郊外にあるアートのまち」というアイデンティティなどの目的を複合して、複数の拠点における多様な活動を展開している。地域に根差してアートと「生きること」をつなぎ、それを恒常的に根付かせていくためのアプローチを模索し続けている。

「《半農半芸》大空凧プロジェクト」は、地域住民と専門家が協力し、地域の文化復興と共に専門的な技術を体験する場を提供している。「開発中プログラム ジッケン・ツアー！」は、市内のアートやアトリエを自転車で巡る実験的なプログラムとして、過去の企画に参加した市民個

人との協働によって実現している。

プログラムを通じて地域住民の主体的な参加を促進してきた一方、高齢化など世代間の参加促進には課題もあり、多世代での学びの場づくりと地域社会への文化の定着が求められている。文化や教育、福祉分野との連携を広げ、市民一人ひとりの参加を深め、地域社会の文化に組み込むための構造設計と柔軟なアプローチが求められている。

#### 第4章 事例③筑波大学附属病院 アート&デザインプロジェクト

筑波大学附属病院は茨城県唯一の特定機能病院であり、2002年より筑波大学芸術系と協働して、療養環境の改善を目指したアート&デザイン活動を展開している。ワーキンググループ「病院のアートを育てる会議」は病院職員と芸術系が協働し、芸術系のOB・OGから派遣されたアートコーディネーターが活動の調整を担っている。国内でのホスピタルアートの先駆的な事例として評価されている一方、コアメンバーの入れ替わりにより組織としての長期的な合意形成に問題が生じることもあるため、長期的な協働体制を保つ仕組み作りが求められる。

病院内では、芸術系の作品展示や空間デザイン、学生によるワークショップ活動などが行われている。学生チーム「アスパラガス」は、2015年から芸術系の演習授業の一環として、「病院の空気をおいしく」をテーマに院内の空間プロデュースやワークショップなどの活動をしている。いずれの活動も毎月の「病院のアートを育てる会議」で審議・報告の上で実施されている。

ワーキンググループの構成員は、それぞれが医療と芸術という高い専門性を必要とする立場にあることから、「病院のアート」に関する根本的な捉え方が異なり、会議において同じような論点のすれ違いを繰り返すという課題が浮き彫りになっている。病院のアート活動においては「病院から生まれるもの」と「病院を巡るもの」という2つの活動があり、前

者は院内での制作や患者との交流を重視し、後者は継続的な展示を目的とした活動である。後者は即効的な効果をもたらす一方、教育目的との間に齟齬が生じることもあるため、実施には慎重な議論と調整が必要となる。過去の活動事例に基づいたプロジェクトの位置付けとノウハウを引き継ぐための体制や、全体的な方針を設定し、長期的に展開できるシステムを再構築することが求められている。

#### 第5章 持続可能なアートコミュニティ

アートコミュニティの持続可能性には、組織体制とコミュニティの相互作用が重要である。公共芸術施策とコミュニティ・アートが交わると、アートプロジェクトは組織的な体制と主体的な関わりが融合し、コミュニティ化していく。一方、組織の規模が拡大すると、トップ層とロワー層の距離が拡大するため、調整役としてのアートコーディネーターが重要な役割を果たす。トップの方針を実行に移し、ロワー層のニーズや現状を反映させることで、ミドルアップダウン型のマネジメントを実現する。組織が成長する過程ではコミュニティ内の多様な関わり方や立場の曖昧さが生じるが、ボランティアに頼り切らず、アートコーディネーターのような役割を明確化し、組織体制を整備することが求められる。組織的な体制としての役割と、自由度の高い役割は区別し、コミュニティとして「ゆるやかで可変的な」あり方を目指すことで安定と創造性を両立することができる。アートコーディネーターなどのコアメンバーは、組織内で柔軟な対応が可能な位置に安定的な拠点を確保し、頻繁なコミュニケーションとフィードバックのシステムを構築することが効果的である。

アートプロジェクトが一定の実績を積んで活動形態が定まってくると、コミュニティとしての方向性を再設定する必要がある。多様な先行事例をもとに、組織を含むコミュニティとして安定するための要素を絞り、近隣や関連団体との連携体制を構築することで、コミュニティと

してのアイデンティティを確立することができる。柔軟なプログラム展開が可能な組織構造と拠点の連携体制を整備し、社会の変化に対応した持続可能なアートコミュニティを築くことができる。

#### 終章

アートコミュニティは、まず個々のターゲットに合わせた多様な拠点や事業を複数展開し、コアメンバーに設けた役割の引き継ぎによってプロジェクトを継続させる仕組みづくりを行う。その後、これまでの実績を総合的に関連づけた知見と構成員の実感を重ね合わせた主体性が発揮できるプロジェクトのバランスを検討し、地域社会や組織の中に文化としてプロジェクトの構造設計と連携体制を組み込んでいくことで、時代と社会の移り変わりに合わせて安定した拠点のもとでプログラムを柔軟に変化させていく持続可能なアートコミュニティが実現すると考えられる。

本研究は、長期間継続してきたアートプロジェクトをもとに、持続可能なアートコミュニティのあり方を考察した一方、資金や人材確保の難しさから、現実的には事例として取り上げたような「継続的なアートプロジェクト」は稀有な事例に過ぎないとも考えられる。しかし、継続的なアートコミュニティの実例に生じる課題の共通点や相違点を明らかにすることで、アートプロジェクトをより長期的な視点で捉え、どのような過程によって組織体制を整備し、地域の中に組み込まれていく中でアートコミュニティとなっていくことができたのか、それがさらに「持続可能なアートコミュニティ」となっていくことためにはどのような要素が必要となるのか、という将来的な展望を明らかにする一助になるという点で、本論文の価値を認めたい。今後、持続可能なアートコミュニティとなり得る可能性のあるアートプロジェクトが継続してアートコミュニティとなるまでの過程や、そこに生じる課題に対する方策についても検証が必要だと考えられる。